

私の保育

——毎日の生活の中で思うこと——

子どもと毎日を共にしてから、もう今年で五年めになります。長いように思えた時もありましたが、やはりあっという間でした。初めて子どもの前に立った時から、今の気持ち比べますと、随分と凶々しくなった自分に驚いています。

新卒で担任したクラスは、何ひとつ私のいう通りにはなってくれませんでした。学校で習った事をあややつてみよう、こうやってみようと期待に満ちて子どもの中に入っていったのに、すべてがカラ振りで毎日が本当にショックでした。「集まりましよう」といっても部屋にはバラバラと

岡嶋優子



子どもがいるだけ、私の声なんかどこ吹く風、あちこちで子どもは好きなように動いています。子どもをひっぱる事だけを考えていた私に子どもたちというかたまりが、実はひとりひとりなんだと教えてくれた気がしました。何て大変な仕事を選んでしまったのだろう、それが私の倍以上に子どもが見えた第一歩であると思います。

子どもっていうのはこんなものなんだなあと思えた時、みごとに覆された事、こういう時はこうすればいいが全く通用しなかった事、あまりにもはつきりと、本当の事を云われ愕然とした事など、それらにぶつかる度にいつの間

か情性に流されている自分に気づき、新鮮になりたいと思
いました。

私の経験はまだ僅かなものばかりですが、それでもたく
さんの子どもたちが私の前を通り過ぎていきました。子ど
もの中で感じたり思ったりしたものが、徐々に自分の中で
たまっていて、今の私ができるのだと思います。私
にぶつかり、私がぶつかりしていく毎日はお互いに影響な
しではすまされない、大切な毎日なのだと考えています。

私は子どもが「先生、おはよう」と登園してくる場面が
好きです。私の保育室は門から離れていますので、小さく
見える子どもがだんだんと近づいて来る様々な姿が目に入
ってくるのです。私の顔を見るとニコニコとして急に駆け
出して来る子、鶏の方へ「こんにちは」をしてから来る
子、すべり台を触りながら部屋に入って来る子、いつの間
にか私の前にいてにっこりと笑いかける子など、いろいろ
です。一日の始まりはどの子にとっても気持の良いもので
あってほしいと思わずにはいられません。何をしようかな
ど、輝いているような子に接すると、私は何もしなくても
この子たちは自分のやりたい事を見つけ、その子なりに考
えてすすんでいけるのではないかとも思えるのです。子ど

もの中の秘めたる力は個人差はあるのですが、きつときつ
と遊びの中で何かのかたちとして出てくる事を信じていま
す。

現在、私は年少を受け持っています。四月の状態が仮の
姿とはいえ、その不安は相当なものだったでしょう。でも
泣いて泣いて次の日もやっぱり泣いてきた子も、幼稚園を
我が者顔で走りまわり泥だらけになってきました。めちゃ
くちゃに遊んでいる子どもを見ると、そこには私を寄せつ
けない何かを感じます。自分の中にひたりきっている子に
対して余計な言葉かけ、遊びの提示などは必要ではないの
では…と思う事もあるのです。クラスの中には、三十四人
の子どもがいます。さまざまなお子たちで、本当の意味
のぶつかりあいを探っている毎日です。子どもに自分を
出して遊んでほしいと願っているのですが、私は子どもの前
で自分をさらけ出しているのかと疑問になるのです。一緒
に遊ぶことひとつでも、子どもに教えられる事は大きく思
います。

Y子とのこと

先日、ひとりの女の子が「Yちゃん、すみれ組じゃない

方が良かった」とはっきりと私に云いました。心の中でドキリとして、「どうしたのかしら。楽しそうに毎日遊んでいるのに……」と思い、率直に「どうして」と聞きました。Yちゃんというその子は伏目がちに、「だって、先生遊んでくれないんだもん」とつぶやきました。大変しつかりとした子です。おかあさんごっこでも中心になって遊ぶし、たまごごっこという遊びを考えたとように発想の豊かな子です。「ごめんね、Y子ちゃん」私がそう云っても彼女は不満げで、さつとどこかへ行ってしまうました。子どもの中に溶け込んで、めちゃくちゃになる事が少なかった、頭ではわかっているつもりだったのに実際やっていなかったのだと深く反省したのです。

Tくんとのこと

Tくんは身体は小さいのですが、強く自分を持っている子です。集団で動く時はテコでも動かないのですが、この頃、私のところに来て「先生、戦いごっこしようよ」とか「かけっこしようよ」とかかかわりを持ちにきます。戦いごっこといっても、追いかけてまわしたりむかってくるTをつきとばしたり、持ち上げたり、ひっぱりまわしたりする遊

びなのです。Tは単純な繰り返しをととても喜び「やって、やって」とせがみます。チャンスだ、「やって、やって」がいつかは「やろう」になって私から離れる事を信じ、できるだけ要求にそって遊びにじっくりとかかわろうと思いました。追いかけるとキャキャと笑い、走りまわり実に楽しそうでした。何日も追いかけてごっこや戦いごっこを繰り返したある日、私の中で「大分遊んだから、もうこのへんでは……。」という考えが出てきました。

ちょうど園庭で年長のリレーを見た子どもたちが、自分たちでリレーを始めようとしていたので私はTから離れリレーの方に行きました。ところがリレーが始まると、円筒をどんどん足で蹴飛ばす子がいます。Tです。いそいで走ってTのところに行く、彼は顔を下にむけ、私を意識してブスツとしています。おもしろくなさそうな顔、不満がいっぱいの顔です。それはあの戦いごっこをしている顔とは全然ちがっていました。その顔を見て、「大分、Tと遊んだからもう……」と思った私の考えはまちがっていたとはつきり感じました。大分遊んだから……と思っていたのは私の方で、Tの方ではなかったからです。それはT自身が決めることで、そこに出来た時に初めて結果がでるのでな

いか、私の判断で私が主導権をとっている限りTは決して満足しないのではないでしょうか。「先生が戦いごっこやめたからおこったんだね」と云うと「うん」とうなずきました。

Y子との事もTくんとのも、理解しようとしても子どもとの間にズレが出てきたでき事です。何年か経験していると、経験の中に甘んじ、自分なりの見通しの上に子どもを乗せてしまう、そんな自分にハッと気づいた瞬間でもあります。

Mくんとのこと

自分からはまだなかなか動きにくいMという男の子がクラスにいます。Mは入園してから三日間程泣き続け、その後は顔がこわばりガタガタと震える位緊張して幼稚園に来ました。イヤがる手に接する度に、何でこんなにイヤなのに、幼稚園にこなくてはいけないのかしらとふっと思う時があります。とにかく悲しそうで、つらそうで、不安そうなのです。どのようにかかわったら気持ちをほぐしてあげられるかしら、そんなある日、砂場だったらどうにか動ける気配を感じました。砂場に私が行くとMもおそろおそろ砂

をさわります。でもすぐにやめてしまいました。

次の日、たしかにMの姿は見たのですが、ロッカーにもかばんと帽子がなく、部屋にも姿が見えません。あれっと思い砂場に目をやると、かばんと帽子をつけたままでもかみ込んでいるのがMらしいのです。「砂場やっているのか、じゃ、これ置いてくるね」あまり干渉してはいけないと思います、私はMの帽子とかばんを持っていきその場を離れました。砂場の中には入らず砂場のへりの外から、ほんのひと握りの砂を指の間からサラサラと落としています。指で砂の上に丸のようなものをぐるぐる描いています。自分からMが動き出してきたようなので私は一つ安心しました。そのうち、プリン型を持ってきて次々にプリンを作り大きな声で、一、二、三と数えました。それが入園してから初めて聞くMの声、実にはつきりと張りのある声でした。

それからのMは、だんだんと表情も柔らかくなって自分なりに動き出してきました。出席の返事ができたり「おはよう」と声をかけるとニコリとしたり、一斉に絵を描く時にできたり、そのひとつひとつに私はMとの距離がどんどん近くなったような気がしたのです。動きにくい子で私

自身気になっていたので、たえず認めたり手をかけたたりしていました。

ところが、そう思っていたのは私だけでMは簡単には心を聞いてくれませんでした。むしろ、私が気になっている事をうるさがり、干渉されたくない動きもあるようでした。今日動いたので、また明日も思っているとジッと黒板の前に座り、一日中そこにいました。懸命にそこにいたのだと考えるようにしたのですが、頭の中はMを何とかしようと思う気持でいっぱいだったのです。

子どもは、こちらの感情を素早く感じる鋭い部分を持っているようです。まるつきり気になる事を忘れる瞬間があっても良いのではないのでしょうか。たえず頭の中にあり、いつも何かしようときまとうと案外にうるさがる子どももいるのだと思います。Mとの事も私が、いそがしさにかまって頭からスッポリと忘れられた時、実はM本来の動きになるのではと考えています。子どもの中にいて私自身、目立つ存在になりたくない、先生がどこにいるか見えないことがあってもいいのではと思うことがあります。

ひとりひとりちがう中で

私は子どもと接していると、その瞬間、瞬間、どうしたらいいのか、こうだろうか、それともああなのだろうかとか考えます。考える暇もなく子どもがぶつかってくる方が多いかも知れません。何かを感じ近づいていく毎日です。私の一言、一言が目の前の子どもにも多分に影響を与えるとすれば、むずかしく恐くも感じます。だからといって何もしないのではないのです。何かを求めている子どもたちにはやはり援助したり同じになって動こうとします。あの子にこうしたから、この子にもと考えて、かかわりが持てないこと、先生と子どもの感情のまじわりであること、いつもこれで良かったのか、やっぱりこうではないかと悩み、それでいて答がはっきりとしないこと、最近少しずつ現場としてとらえています。そう思う根底には、ひとりひとりがバラバラで全部違うことにかえるような気がします。今まで生きてきた環境が違うのですから遊びに対しても、友だちに対しても反応はそれぞれです。思い方や感じ方、技能、体力などがひとりひとり違うのです。ひとりひとりに目を向けて、ひとりひとりにあった指導をしていきたい、ちがう育ち方をしているさまざま子どもたちを全体でとらえるむずかしさを感じます。

子どもの動きは自由に変化し、あらかじめこうしようというより、子どもと一緒にたつてその場で考へることばかりです。子どもの動きを待てる教師でありたいと思うのですが、むずかしく、つい先ばしりしてしまいます。また、子どもの中にいる時は、いつでもありのままの自分でいたいのです。怒りを感じた時はおこり、嬉しさを感じた時は喜び、どうしようもなく辛い時は苦しく思う気持ちを隠そうとはしたくない、人間と人間のドロドロとしたぶつかりあいの中で、きっと子どもは何かを感じるだろうと思うからです。

まだまだこれから先、いろいろなことがあると思います。広い目で子どもを見て、子どもに少しでも近づいていきたい、そして常に自分自身をふり返り余裕をもって保育にあたりたいと思います。一日、一日の子どもの出来事を大切にして何かの意味がある事を知り、わかろうと思う毎日です。

(東京都立柳町幼稚園)

懸賞論文応募期の延期

『幼児の教育』一巻―二十巻の復刻を記念して、懸賞論文募集をお知らせしましたが、この度、大正十年から昭和十九年の二十一巻―四十四巻も刊行されましたので、応募期日を延期し、四十四年分の復刻『幼児の教育』を素材とした研究論文を募集したいと思います。第一期の復刻記念懸賞論文の募集に対して、応募論文が寄せられています。より多くの方の御参加をお待ちしております。

一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで

一、応募内容 復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みた研究

一、応募要領 ペン書き(またはボールペン)とし、四百字詰原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。

一、賞金及び賞品

最優秀賞	一名	賞金二十万円
二等賞	二名	五万円
三等賞	三名	一万円
参加賞	全員	記念品

一、問い合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学
 附属幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

主催 『幼児の教育』編集部
 後援 株式会社コーディック